

[事業報告]

地域社会学におけるフィールドワーク実施報告(2021年度)

中村 洋

山陽小野田市立山口東京理科大学 共通教育センター

Fieldwork Implementation Report in Community Sociology (AY2021)

Hiroshi NAKAMURA

Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

要約 (Abstract)

本学工学部2年生を対象に開講されている「地域社会学」は、学生が山陽小野田市内でフィールドワークを行い(地域に出て調査を行い)、自分が集めたデータを統計的に分析し、課題の解決方法を考える授業である。2021年度は山陽オートレース場、きららガラス未来館、サビエル高等学校、いきいき百歳体操、川上地域でフィールドワークを行い、自らが収集したデータを統計的に分析し、課題の解決方法をフィールドワーク先に提案した。

Key words: Statistical analysis, Regional understanding, Solving regional difficulties,
キーワード: 統計分析、地域理解、地域課題解決

1 地域社会学の概要

本学工学部2年生を対象に開講されている「地域社会学」は、学生が山陽小野田市内でフィールドワークを行い（地域に出て調査を行い）、自分が集めたデータを統計的に分析し、地域課題の解決方法を考える授業である。以下に2021年度の「地域社会学」で行ったフィールドワークの概要と、自らが収集したデータを統計的に分析した結果、フィールドワーク先に提案した解決策を概観する。

2 フィールドワークの概要

フィールドワークを山陽オートレース場、きららガラス未来館、サビエル高等学校、川上地域において、それぞれ2回行った。1回目のフィールドワークは、まずは現場に行き、現物を見ながら、フィールドワーク先の概要や抱える課題について説明を受け、何のために、どのような調査をするかを考えるための情報を収集した。2回目のフィールドワークにおいては、自ら作成した調査票を用いて調査を行った。以下にそれぞれのフィールドワークを報告する。

2.1 山陽オートレース場

学生4名が山陽オートレース場を担当した。1回目のフィールドワークとして、10月12日（火）に学生が担当教員とともに同場に出向き、桶谷一博氏（山陽小野田市経済部公営競技事務所 所長）から、オートレースや同場について学び、来場者が減少していることが課題であるとの説明を受けた。その後、学生たちは学内で来場者の減少要因を明らかにし、対策を検討するための情報を得るための調査計画を立案し、調査票を作成した。作成した調査票は性別や年齢といった属性に関する質問、来場理由、来場するきっかけなどの質問で構成された。調査票を用いて、12月4日（土）の2回目のフィールドワークにおいて、山陽オートレース場の来場者に調査を行った。同場からの要望により、学生が質問を読み、調査対象者から回答を得て、学生が調査票に記入する他記式を用いた。回収率は60.5%（調査依頼数38人、回収数23人）であった。

2.2 きららガラス未来館

学生5名がきららガラス未来館を担当した。1回目のフィールドワークとして、10月2日（土）に学生たちが担当教員とともに同館に出向き、湯城明彦氏（富士商グループホールディングス 資産活用本部 経営企画部 地域開発室 室長 兼 きららガラス未来館 館長）から、同館のことや同館で行っていることを学び、県東部・北部からの来館者数

が少ないこと、夏休みに来場者が偏っていること、若い世代の利用者が少ないことが課題であるとの説明を受けた。その後、これらの課題を解決する方法を検討する情報を得るための調査計画を立案し、二つの調査票を作成した。一つ目の調査票は、きららガラス未来館における調査のためのもので、性別や年齢、来館に要する時間、同館で体験したいこと、商業施設でのガラス体験の意向や適切な時間などを調べるためのものである。二つ目の調査票は、学内での調査のためのもので、イベント情報を得るために利用しているSNSの種類、同館の存在や場所の認知度、同館でのガラス工芸の体験として希望する時間、交通手段、6種類の体験に対する関心の程度などを調べるために作成された。

同館における調査は11月21日（日）と11月28日（日）において、ガラスのハンコづくりの体験に来ていた人たちに行った。協力を依頼し、承諾を得られた人から自記式で回答を得た。回収率は100%であった（調査依頼数25人、回収数25人）。二つ目の調査は12月1日（火）に、本学の地域産業論に参加する工学部の2年生に対して、授業後に調査への協力を依頼し、承諾を得られた学生から回答を得た。回収率は100%であった（配布数105、回収数105）。

2.3 サビエル高等学校

学生4名がサビエル高等学校を担当した。1回目のフィールドワークとして、10月2日（土）に学生が担当教員とともに同校に出向き、友廣洋氏（同校副校長）から、サビエル高等学校の歴史や特徴、在籍する学生の傾向を学ぶとともに、同校がラジオ番組を持つことから、どのような内容にしたらよいかを提案して欲しいとの説明を受けた。ラジオ番組の内容を検討するために、学生たちは二つの調査を行うことを計画した。一つ目はサビエル高等学校の生徒へのグループ・インタビューである。二つ目は山陽小野田市内の高千帆中学校、厚狭中学校、小野田中学校の3年生への調査票を用いた調査である。

グループ・インタビューは、11月22日（月）に本学の学生3名がサビエル高等学校に出向き、同校内の教室において、1年生の同校の生徒8名に高校を選ぶ際に欲しい（欲しかった）情報、実際に高校に入学して気づいたこと、ラジオを聞く頻度について聞き取った。

中学3年生への調査は、山陽小野田市教育委員会及び高千帆中学、小野田中学校、厚狭中学校の協力を得て、12月に行った。調査票をgoogleフォームで作成し、同フォームにアクセスできるQRコードが印刷された依頼状を3校の全3年生に配布し、中学生が有するChromebookでgoogleフォームにアクセスしてもらい、回答を得た。高千帆中学校

134名、厚狭中学校100名、小野田中学校109名から回答を得た。調査票の構成は属性、高校の情報を得る手段、志望校を選択する際に重視すること、私立高校に対する印象、高校について知りたい情報、ラジオを聞く手段と頻度であった。

2.4 いきいき百歳体操

学生5名がいきいき百歳体操を担当した。1回目のフィールドワークとして、10月9日(土)に山陽小野田市高齢福祉課地域包括支援センターの職員2名が本学に来て、いきいき百歳体操とは何かを説明した後、体操の継続性やモチベーション向上、参加頻度の増加につながる方法を提案して欲しいとの話があった。

学生たちは解決策を検討するために必要な情報を得られる調査計画を立案し、調査票を作成した。作成した調査票は性別や年齢といった属性に関する質問、体操を知ったきっかけ、継続期間、参加頻度、会場までに要する時間、移動手段、満足度、継続意図、継続して参加するために重視していることなどである。調査票を用いて、2回目のフィールドワークにおいて、学生はいきいき百歳体操の参加者に調査を行った。調査は11/10(木)に本山公民館と刈屋自治会館で、11/22(月)に須恵東自治会公会堂と龍遊館で、11/24(水)にくし山自治会館で行われた。いきいき百歳体操の会場に出向き、体操参加者に調査票を配布し、自記式で記入してもらった後、回収した。回収率は100%であった(配布数58名、回収数58名。回収した調査票は刈屋自治会館13、本山公民館10、くし山自治会館19、龍遊館7、須恵東自治会公会堂9であった)。

2.5 川上地域

学生11名が川上地域を担当した。1回目のフィールドワークとして、10月9日(土)に山陽小野田市山陽総合事務所を訪問し、地域活性化室の山村正吉氏より川上地域の概要について説明を受けた。その後、川上地域を訪問し、地域住民から川上地域における取組について説明を聞いた。山村氏からICTを活用した地域活性化の方法と、地域住民の交流活性化の二つの課題の解決策を提案して欲しいとの依頼が学生に対して行われた。

学生たちは提案を検討するために必要な情報を得られる調査計画を立案し、調査票を作成した。

川上地域については二つの調査を行った。一つ目は地域内の交流活性化を探るためのものであり、5名の学生が担当し、川上地域の住民が集まるイベント「井戸端カフェ川上」(11月23日(火・祝))に参加した地域住民34名、参加しなかった地域住民15名(自宅を訪問しての調査)の計49

名に調査を行い、全員から回答を得た。調査票は、属性、コロナ禍での交流機会の変化、どのような交流機会を増やしたいか、インターネット上での交流で用いている機器やソフト(アプリ)、インターネットを通じた地域内外の交流意欲などである。

二つ目は、川上地域で開催されたイベント「収穫祭」(11月27日(土))に域外から来場した人たちに6名の学生が調査を行った。目的は、域外からイベントに来る人を増やす方法を検討することである。調査内容は利用しているSNS、収穫祭で買いたいもの、あるとよい情報、満足度などである。収穫祭の来場者113名に対して調査を依頼し、95名から回答を得た(回収率84%)。

3 学生による分析・提案

学生はフィールドワーク後に統計的な分析を行い、フィールドワーク先に課題の解決方法を検討し、プレゼンテーションを行った。以下に提案内容を中心に以下に整理する。

3.1 山陽オートレース場

来場理由の中で、より強い理由は何かを確かめるために検定を行った。その結果、娯楽として楽しみたいという希望が有意に多いことが分かった。現在はオートレースの予想や解説、レーサーのトークショーなどのオートレース関係のイベントが行われているが、それから離れて楽しめるようなイベントを開催することで、来場頻度が増加し、来場者の増加につながるのではないかとという提案を学生は行った。

来場にかかる時間と来場理由について相関分析を行った結果、レースを生で見たい人、会話を楽しむために来場する人ほど、来場時間が短い傾向が見られた。近くからの来場者はレースを生で見て、会話を楽しむために来場していることを示していると考えられるため、近隣の人たちに同場が会話を楽しめる場であることをアピールすることで、近隣からの来場者数を増やせるのではないかとという提案を行った。

来場日数と来場理由について相関分析を行った結果、レースを生で見たい人、会話を楽しみにしている人ほど、来場日数が多いという関係性が見いだされた。本場開催は他場との調整が必要だと思われるものの、会話を楽しめるような仕掛けをすることで、来場日数が増え、延べ人数としての来場者数増加につながるのではないかとという提案も行った。

3.2 きららガラス未来館

きららガラス未来館で行った調査について、家族で参加したいかという回答と来館までの時間について相関分析を行った。その結果、有意な負の相関が見られた($r=-0.48, p<0.05$)。家族で参加したい人は、来館に要する時間の短い近隣から参加していた。そのため県北や県東という比較的遠方からの参加者を増やすためには、一人や友人など、家族以外と参加したい人向けのプランを設けることを学生は提案した。

家族で参加したいかと、同館で体験できる6つのプログラムへの関心について相関分析を行った。その結果、家族で参加したい人ほど、ジェルキャンドルの体験を希望するという正の相関が見られた($r=0.50, p<0.05$)。この結果から学生は、家族向けにジェルキャンドルの体験イベントを閑散期に行うことにより、閑散期の体験参加者を増やせるのではないかと提案を行った。

学内の調査で得られたデータから、友人とガラス工芸体験に参加したいかに関する回答と家族、先輩、バイト仲間、恋人と参加したい、一人で参加したいかに関する回答に違いがあるかをt検定により分析した。友人と参加したいという意向は、家族、先輩、バイト仲間、恋人との参加意向よりも高いことが分かった。そのため学生は友人と参加しやすい仕組みとして、友達と参加することで料金が割引かれるプランを導入してはどうかという提案を行った。学生はインテリアとして使えるようなガラス工芸を作りたいという意向が大きいことを明らかにし、インテリアとして使えるようなガラス工芸の作成体験を充実させることで若い人が来場するようになるのではないかと提案を行った。

3.3 サビエル高等学校

グループ・インタビューの結果から、校則が厳しい、校内偏差値の振れ幅が広い、行事予定を知りたかったという意見があった。ラジオについては聞かないという回答が多かった。またサビエル高校の先生は面倒見が良いという意見があることが分かった。

3校の中学3年生への調査で得られたデータから、ラジオを聞く手段、中学生が知りたい情報の提供、同校のイメージ向上のためにラジオで発信することが望まれる情報を分析した。

手段としては、ラジオを習慣的に聞く学生は主に自宅ラジオを用いているため、家に帰ってからの時間に学生向けの情報を放送することが効果的なこと、それ以外にもスマホアプリなどを用いてラジオを聞けるようにすることで、ラジオを聞く人を増やせるのではないかと提案を行っ

た。ラジオを聞いている中学生が少ないことから、インターネット(HPなど)やパンフレットによる大々的なラジオやサビエル高校の広報活動を行うことや、ラジオは学生だけでなく学費や通学距離などの家族や先生に向けた内容も放送するとよいこと、スマホアプリなどで聞き逃しても聞けるようにすること、放送時間は夕方か夜がよいのではないかと提案も行った。

ラジオで流す内容としては、サビエル高校の校風や部活動(生徒たちの学校生活→授業の様子や生徒の声、部活動の報告、先生の紹介など)、施設や設備(タブレットや実験室などの専門的な教室の紹介など)、年間で行われる行事予定(テストの頻度や文化祭など)が望まれていることと、それを3年生の前半(4月~7月)に放送することが、生徒数増加につながるのではないかと提案を行った。

3.4 いきいき百歳体操

得られたデータから、体操の継続期間と満足度、今後の継続意図について相関分析を行った結果、継続期間と満足度について正の相関が見られた($r=0.37, p<0.01$)。フィールドワークを行った際に、いきいき百歳体操の会場では体操だけでなく、歌や他の体操、脳トレをしており、参加者には一体感があり、会話も多く見られたことから、楽しい活動や会話が充実すれば、いきいき百歳体操への満足度も高まり、継続期間も長くなるのではないかと考察を行った。

満足度と参加理由についての相関分析を行った結果、参加者と一緒にいられることと満足度には正の相関が見られた($r=0.28, p<0.05$)。体操会場では複数の人たちがワイワイとおしゃべりや活動をして同じ時間を過ごしており、地域の人たちが一緒にいられる時間を提供することで、百歳体操そのものの満足度も高めていたと考察した。この考察に基づき、いきいき百歳体操を地域の人たちの交流の場として捉え、一緒にいることで楽しめるような活動メニュー(歌、遊び、学び)を実施会場の主催者に提供することで、百歳体操の満足度を高められるのではないかと提案を行った。

百歳体操の満足度と体操を長く続けるために重視していることについて相関分析を行った。その結果、仲間と集まって活動できること($r=0.51, p<0.01$)、気持ちが前向きになるなどの精神的な効果を感じることが重要だ($r=0.46, p<0.01$)という質問への回答と満足度に相関が見られた。フィールドワーク時にも仲間と集まり、歌や発声練習をしたり、新しい活動をしたりと、一緒に体操をする仲間と活動をしていたことから、仲間と一緒に何かして、気持ちが前向きになることで満足度も高まったものと考えられ

る。歌を歌う際にはギターやハーモニカの生演奏とともに歌っていたが、楽器ができないので歌が歌いにくいという会場もあった。いきいき百歳体操の参加へのモチベーションを高めるために、仲間と生演奏で歌えることは重要と考えられる。例えば楽器ができる学生が、楽器ができる人が不在のいきいき百歳体操の会場でボランティアをするなどして、満足度を高めつつ、学生の地域貢献を進めることを学生は提案した。楽器ができる男性の参加を求め、参加した男性に役割を設けることで、男性の参加も進むのではないだろうかという考察を行った。

3.5 川上地域

地域内の交流活性化を探るための調査結果の分析や学生の提案を整理する。年齢と地域内外の対面での交流意欲、インターネットを通じた交流意欲について相関分析を行った。その結果、年齢が高くなるほど、地域内の人たちとの対面での交流を望んでいることが分かった($r=0.52$ 、 $p<0.01$)。インターネットを通じた交流については、有意な関係ではなかったものの、年齢が上がるほど、望んでいない傾向が見られた。電子機器を活用した交流をするにしても、地域内の人たちが対面で交流機会を設けることが有効だと考えられた。学生は据え置き型のゲーム機等の娯楽機器を各集会所に設置し、それをを用いた地域内の人たちの交流を促進してはどうだろうかという提案を行った。

域外からイベントに来る人を増やす方法を検討するための分析と提案は次のとおりである。種類、価格、量についての満足度と来場した時間について相関分析を行ったところ、種類と来場時間には有意な相関が見られた。来場時間が遅いと種類が減少し、満足度を低下させていると考えられることから、学生からは種類について、遅い時間に来ても多くの種類を入手できるような改善をすることを提案した。収穫祭で事前に情報があるとよいものとして、出品内容、出品時間、在庫状況、価格の回答について検定により違いがあるかを分析したところ、出品内容についての情報が望まれていることが分かった。SNSを通して来場者にリアルタイムで出品内容や出品時間を拡散することで、必要な情報を届けられるようになり、来場者の増加につながるのではないかと提案がなされた。収穫祭の来場者を増やすためには、最初はSNSと広告、チラシを併用して、川上地域について情報提供を行うことが提案された。

4 まとめ

担当教員として、フィールドワークの成果と課題を整理する。

成果としては、学生が山陽小野田市内でフィールドワークを行い、自分が集めたデータを統計的に分析し、地域課題の解決方法を考え、フィールドワーク先に提案するという一連の流れを経験できたことである。

川上地域については、学生の提案を受けた山陽小野田市山陽総合事務所地域活性化室が、翌年度にeスポーツを通じた地域内の交流活動、SNSを通じた川上地域の広報を行うこととなった。令和4年度には学内でボランティアを募集し、同室とともに川上地域において活動を行う予定である。学生たちのフィールドワークと分析・提案が実現し、社会実装につながったことは成果と言える。昨年度の紀要で報告¹⁾した際に、三つ目の課題として、学生の提案が社会に実装されるような調整を行いたいとしたが、それが実現に向かっており、一つの課題は解決に近づいたと考えている。

ただし、昨年度の紀要¹⁾で、一つ目の課題として挙げたフィールドワークで回答を得られたサンプルの少なさについては、山陽オートでは今年度も解決することができなかった。山陽オートについては調査を依頼しても断られる頻度が高いことから、学生がストレスを感じているように見受けられた。来年度はフィールドワーク先について、学生がストレスを過度に感じない場所に絞る必要があると考えている。

謝辞

学生のフィールドワークにご助力頂いた皆様にこの場を借りて、お礼申し上げます。

参考文献

- 1) 中村洋:地域社会学におけるフィールドワーク実施報告(2020年度),山陽小野田市立山口東京理科大学紀要,5,4頁,2022年,99-102.